特1
2223

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223

ガラス使用

琴後集序

和歌詩也、短歌絶句之類也、長歌歌行之類也、六義既備、抑揚頓挫、亦如詩然、余獨讀藤式部源氏傳知左氏莊周司馬遷之文、可以和言爲之、源氏傳以上、何其無聞也、源氏傳以後、何其無繼之者也、和文既有左氏莊周司馬遷之文、安

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

特1
2223

得無唐宋八家之文哉、求之於古而不得、求之於今而得之於平春海先生、先生有琴後集如干卷、其歌則不復論、余獨論其文曰、記廿一首、序十八首、題跋十二首、書牘廿三首、雜文三首、墓碑二首、祭文一首、外集卌八首、編文具此諸體、非唐宋八家別集之制乎、升降前

却、不失分寸、文其步驟也、抑揚開闔、操縱起伏、文其變化也、整齊而錯落、勃窣而婉曲、文其鮮氣也、前提後襯、回抱接初、留筍待後、奇峰突起、横雲斷山、文其形勢也、截然有畍段落之文也、綿然相屬、過接之文也、承上起下、轉捩之文也、作文具此數法、非唐宋八家之筆乎、

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

先生非獨其於文尒、其於論道亦
云、我邦之所道、周公孔子之道、舍
周公孔子之道、而別取道於我太
古、吾未之聞也、故和字非我字、假
漢字充我音也、衣服冠冕、皆隋唐
制度也、百官有司、皆學唐制稍變
之也、律令格式、皆摹倣唐制也、博
士立明經文章天文陰陽律算音

諸科、不立和學歌學博士、所謂和
歌博士者、出自江匡房戲稱、和學
歌學之名、考之古未之有也、和學
也者、儒者之通
本朝典故言辭也已、歌學也者、儒者
而作歌也已、含周公孔子之道、而
別建道者、吾未之聞也、天竺有釋
氏之道、後漢傳之、而盛於隋唐、唐

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

之詩人有儒有僧、李白杜甫韓愈、僞也、王維白居易、内佛外儒也、其詩非風雅之音、則釋氏之偈也、宮人工女、亦浴二家風者也、吾儕雖庸陋亦儒也、僞而歌者也、

本朝制度文物、已皆奉周公孔子遺法、而其信佛者亦多、故

本朝之俗少而儒、老而佛、自中古以来盡然、由是觀之、非儒則佛、舍此二道而別建道、吾未之聞也、今之和學者、恥我邦別無道、牽强傅會、妄引我古史、欺人欺己、吾安得不辨之哉、質賢先生之持論有超於世所謂和學者流、亘乎、先生之文、卓異儁傑、有唐宋八家之風矣、

日本百二十世天皇文化七年秋九月

陸奥葛質序

自序

昔父の世にいまそかりし時も好ミし道によりて
うたよませたまへりしにつきてもわかきよりそれ
なかなかれの器ともなる家にあまたつとへたる哉
としころたくはへしに火にあひていまだおほく
うせにてゆきてのちあつまりしとつめんとするをなか
こむの志のつくさしとおもひたるなかなし
草稿ども埋れに哉あらたむるにつきてもかひさきふ
筆や哉おのかつねによみすてたるとさなむ

ふたつなくてむかひ侍るハこのあはそまことにおのか
家の宝なれハそてられよ所得させ給てうれ
しかりつるを〔む〕かしより亀合れし琴ひく
事をなすハねと絲なき琴をまさぐりてむかし
さや理し太めしをあれハよてさかれをわのかた
らひ人よてさてことかみよ硯一火よ理一琴志
理よつ一よろ忠をみ濤てまころれさいとの
本よとを琴のあ学ひろむかのん志り人く
まてまていひけくとしものともしきまくる

うれ菜ともハいゆつことまよそかきあはれ弥ハ
ましかをわれら華しにて筆まおしやんといふ
ろハうれしき事なあさるハつゝ示まうの業
琴人本らに学まれさし侍らん事ハ春海の
きわさらまを侍れとあすさとしむかしをよせ
んをこあしもの琴いふつにないて侍らんを
ほいなしとそかくも志てる亀のらんやうよとり
なしまいんと示られしかれとらく筆しれる
人くかのつよわとうてしかきあはれめいそて

ゆゑもて名をあらはすといふはなかなか琴後
とはいふ庵の名によそへてなれまきのえしつゝ
たまふなるをつけさせ給へる

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴志津の公将

春歌

年内立春　平春海

ほのかにもまれ待人にいそがれてやがてのうちよりまちや来ぬらん
ゆきまてるまつ行き花ねよそよにほはきのねんなるらんは

元日

むつ月の春まつ梅をかざしつゝこゝろも春はふりくるき世
めぐみしとまを待とるらんのどかくゆれどもかざしさる来れ
春にはやまふりもおしてこん朽木ゑたる花のこゝろも
けふ日本のひろまちとる和かなく御ゆやすき世のはるたつらんを

元日雪のあか来れい

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

霞たちあくる朝戸にさく梅の枝もの音こそせて春は来にけり

元日宴の心をよまするに人にかはりてよめる

庭の雪の跡もめづらし朝まだき先春をとめしきはるこゝに入て

禁中立春

清らのさく日の雲てはのくるとあくる禁門に春はきにけり

春のはじめに

ほくさ緑の高嶺乃をゆる霞ほのすみ河原に春たちにけり

百日うちもくるゝもはじめなり君のみよに春とつげしも

歳暮迎春

あやめも布の年もあらたまへ春来にけりとこゆるぞ朝に

こぞもちとおもひて久しうも待ちわびまするに春立てよるを

わらはうちを毎におほん侍れは

雲ゐにはあへしと思ひし老が身のまたしもそれの春に逢にけり

くち木そとなにおもひけむさく花に逢こともかなはず春にあふ身を

早春海

浅緑海わたともみえず朝かすみ志賀の浦にたつ立しより

氷解

志ほりゐしかきねのほとりさえしとまつの田みずに春たちにけり

泉響滴春風

あふきりや岩つたのしたにおとまかて氷をとくはるのやま風

風光日々新

難波えや志ほりなかるゝ朝こゑにはるのくむあしの根そそひゆく

国立国会図書館 タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

江上春興多

よるなみもほに出て江のうら柳いつまでの春にみどりそむらん

春色浮水

ほのぼのと霞む河辺のあさ風に春たちかへるなごりのなみ

毎山有春色

うち続くと出る日影にさそはれてかすみにほはぬ山の端もなし

春日

打むかふ里の波をひかりそふ朝日にほへる春の河つら

春日登山

をはしもの高嶺を雲にあらはれて霞に浦ふむ山もみゆ

大ひえやをちこちの山の影かすみそめかゝる春のいろふ

かひもなの高根のゝ雲かつきえて立はむかふやまかすみなり

春興人意中

春と以て人のこゝろぞ争はぬ世をも外にもあはれのこかゝる

白河少将殿にめしける時陽春布徳といふことを

雲もおえこのなもとえてむさしのゝはるの光ぞかよひ来ぬ

泉暖草色春

氷るしいまきえてはるそゝゆるぬ小麦なる池をはるか

家々翫春

ここやこ人なるいるとかくしてかゝのすさみにもあひにはきつゝ

春風和芳

梅が香をさそふ軽い中しとあやなき雲もよしそみえける

子日

子の日する野への(ためし)と引まつはひかれて千世の春やかさねん

孫乃日まてと引や小松のすゑこゝろも袖のみとりそ千世のいろなる

新草やまたはとゝゆきの緑をそ千世乃子の日のためしにはひく

長枝の家の子日に

松もひくわれもひかれて千世やへんもつむをいはふ宿に来ぬましい

かくしつゝ千世をかさねん君かまいく子の日乃松もむつましきかな

わすれめやいはふもは子の玉もてき箒にすゑぬ君のまゆなるも

引そひよめはましきみやとの松あまたみとるまかはくとへるも

かくしはく松の枝えもとしまたもあらへてきくは子日をいせ世

百首歌の中に正月子日

うれしさと引かさねよと春のはしめに子の日やめくり来ぬらん

梅かやに子日しに侍りて

梅か香ははつねもとはんを春の松にひかるゝ心なるかな

賭弓

ためしとて繁かし種をのさつやをか心あらはすもまとの旋

世殿のかへるあるしやまつるらんいにしへのはらさの徒つとふなり

霞

みまくせは端ふしまかしらへてかすみなもえて色なかのかゆり

なしの祢の霞さへ春の色見えてかすみそめける野はらにて

初春霞

春いまたあさ緑のやまのう次かすみ来ふくに海ふ色としもなし

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

山霞

春かすみ八重たつ時は見わたしの山さへそこともわかぬさとかな

霞添山色

うすくこくかすみそめたるあしたより日ごとにはそふ山の色かな

暮山霞

立なびくふもとのひばらかきくれて霞にのこる夕づく日かげ

嶺上霞

みよしのゝ山のみねなるさくらには根のうへけそ先霞たつらむ

遥峯帯晩霞

夕日さす神のみさかはあらはれてかすみにへたつあしからの空

ゆふかすみ帰る跡をかつまえて霞にのこるをちかたの山

浦霞

住の江のうらの松風たえてかすみにまがふ沖つしら浪

江霞

なにはえや波のうへかすみをはしはるゝ霞のそこにこそあれ

行路霞

あきことのかよふ袖もほのぼのとかすむ道や旅の春そめと来れ

松原霞

云ひくるも先う浪をきて三輪山をたにもかくせる夕かすみかな

湖上霞

布施の海や春深かりし漁火のかすみのそこもほのかくしけり

春畑

入日さす遠山もとの里みえてかすみをわくるゆふけふりかな

鶯

花さきかぬ山さとのうくひすやわきていはやも春をしらするらん

うくひすの声はいちはやき山さとはかなかうとしには誰かいひけん

いさゝめにいさゝむら竹うちなしよわかく鶯の声そかきせぬ

早春鶯

鶯もかしこのさえたを来ふしともよ根さしの初音をそ鳴

南枝暖待鶯

うめ柳まつよ江のこなみすはむつ鶯の音も漂はれ来り

鶯のむつ声をまてつやと人のとひそれは

かくて世の春をまつなる宿なきい鶯の音もうとくそあり来る

春鶯呼客

来うくひすの声すなひの花て花もなきやとは宿とと人をやとひ来る

目ほかる人のもとへ鶯を歌声といふことを

鶯の初音そ子世をよはふなるたまほう河るもなる城まちえて

竹裡鶯

はる来ぬときふ告ぐる鶯のこ竹もおくあるそのゝこれさき

うちたつ鶯なく

ほのくと明る枝つくるうくひすの声すしふある園のうめか枝

窓鶯

なきてこそ知らもゝかくれ竹もそとさくめよ浦との鶯

閑居鶯

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

その人をまつるすみやかにかのうち我とかくしてゆきのうくひす

里鶯

かすみたる竹田のさとをとひしかはほうくひすの声をそきゝける
すくひまの窓のすたれひきさそはまてる名なき里もはるやしるらん

雨後鶯

春雨のゆふくれ雲のはれしめて宿やかなく鶯のこゑ

若菜

消ぬまかつ雪のきえしけれはたつぬるわかなさくら

多年摘若菜

いくとせかふるの野の末のあすの春わか菜摘そふらん

雪中求若菜

かきわけて見れとも雪の下くさはきえて摘へきものゝなきかな

人よりわかなやるとて

初春の若菜をはしめそうれしきことの数をはつ春

女わかなつむを見て

春とやの野のゆきをわかなつむとれはわかなをさへそはしくとそみる

春雪

みるめのちるははなかとおもふ淡雪はもゆる野のわれいはしくか

残雪

わすれていなかのをちも消えし山の木もとも日数へてはなるゝ志らぬる

雪消山色静

雪とけて花まはなの山にかすみそめにはそむ春のいろなる

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

梅

うち寄する汀の袖さへかをるなり流るゝ梅は花のさかりには
なかなかにしづえの色とみし夏のおもかげうつす梅乃下道
春風はいかに忍ぶの木のもとに梅が香なれぬ袖やかれなる
いく梅に香にほひける花の心よりはやひさしとは人はしらまし

梅に風静

春風はあるかなきかの梢よりおのれとかをるうめのにほひに
霞むかとまがふる梅乃にほひにて末わけおかれぬ野風ぞふく

隣梅

井垣のこなたもすほふ梅の花わきてまし春はいかにるの匂ふる
一本の梅をかきねに交として隣る軒乃むつましき

里梅

はるの香に夏のなごりやふかからむ緑さめの里乃春の昨日の
梅の花さかりに山里をとふ
山さとは冬もやどのあるじあればかきてもすゝめ春をまつは

梅近衣香

舟よするこゝろもいさしかをるさや梅津の岸乃川風

夕梅

花の陰の香に染めの光そくれぬるみて梅乃色やしいぬる霞もなし

月前梅

梅乃さかりの春やよそれとみし夏のおもかげたどる春のよ乃月
かほりもまほひの光をそへて春の月と梅とやおもふとも見る

月影よりもめてたきと人のとひ来れは折とくといふらは
さく梅のよそのひかりやそへてまし春の月影よし霞むとも

月の夜梅かをれる

月よゝし梅の香清しいさゝらはこの下かけに枕ならへし

かつしかの梅見に渡りて

松のはらこえなから花をかたる様すそかなれる雪にこもる若か

梅浮水

花の香そ流になかれてゆくみつに移そてむる岸の梅か枝

皆川翁源愿峯ともなひて亭しみの梅谷にゆき

見に渡りて

ちる梅に井くも雲もかえす雪のなかの中くんちのさして

紅梅

たをやめかかさしにゝほゆる梅の色はうへも夕日のさゝこのたち
一枝をゆきの以後にさしぬれは折てかさしこのやとの梅

雨のうちの紅梅

春雨ふりひまくう見のくれかゐいまう出て色濃さかけそ

梅紅白

色をかめかさぬる袂をきる斗以後くし梅の色はゝしきかな

紅梅白梅すまひしなるすといふことを

匂ひ香は春もえぬ梅のいろかさは後のゝ花の色もめみすらん

落梅浮水

水上のちとやいつこそたつみこえう梅か香ちるく春の風の波

柳

あらくとふき風は海のするまで柳ぞかすみなかにかくれざりけり

よりかけし柳のいとぞみどりなる花の木ずゑもまちそめてけり

柳蘸春色

霞の海乃なごりかすめる柳原ほのかにそむるはるの色かな

柳糸緑新

うちなびくやなぎの糸乃あさみどり春くるごとにめづらしきかな

垂柳蘸水

春柳そのかげくれは岸の藻の上そのまゝみちくる春の河つら

無柳條見

あをやぎのうちたれ髪をときほすはたが朝寝の鏡なるらし

柳池の水を払ふ

なつ川の糸とみえしは波あらふよしの柳乃しづえなりけり

水邊柳

春柳乃下枝なみさす河つらをはるかくの糸をあらふとぞみる

なつ柳

かぎろふは波もなびきて春柳のいとよりかくる河つらの里

河邊柳

ゆく川の底乃玉藻とみゆるはかりきしの柳の影ぞうつろふ

雨中柳

春雨そ降るともみえすやなきはらあをきかすみに霞そはふく

柳露

あさみどり霞やそむるとみるばかりぬきとめていろそふ春の柳の糸

梅に雪のかゝれるを

咲きやすむ花雪はわかねどもあやにくに猶ひとめよき梅乃いと

柳似烟

春風のかすみわたれる河つらにもえぬきかけつや柳なるらん

草の以と春ゝやなる坂

はる雨も七日過ぎゆきまつしかへてまひまかちに野へのをゆるい

破春草

あまれるなにもみどりの以ろそへて春なしるその磯乃若草

蕨

袖つまで摘ふやるみの[illegible]すまふにさわらあもれなる初わらびかな

百首の中 忍忽子厳

絶ぬかけの影乃もはなしも見えぬなるも人ぞかくぞはや

初午いなりまうでを

稲荷山杉のもとつ葉をかざしゆくうへは都人かも

いなりやまみな乃神杉のみさきいつくよの人か折かざしそめん

かざしさるけふの[illegible]いつの世に稲荷乃杉はきしも初なん

杉もふさてはみやしろのみしめ縄まれもひすれつ神のんかに

みよとはしおちもゆかいなり坂ぬきとる袖も霞む中に

いなり山杉生の本ともほのしと霞かくるゝ世のたね火

春日祭

春なみの花乃しかひの春ゆきせよためしなきぬ神まつりかな

隼人の立まふ袖も霞むらし二上山のやすみの山霞して

春神祇

おほなほひや祭りしこむの神と名の社はぬきかけかすみはる

岩清水臨時祭

こゝろ人はかざしの花をたまふなるうてなの竹乃葉におとにえて

雲の上乃かざしすけし君かためのとこしへにみよ代ゝ波に残れ

春月

霞ともみえぬまこと雁のなきわかれなる霞むもうれしく里の夜の月

霧中月

かすむ秋の月もきえたどるかわきのこゝろもなれぬるぬさやさ

江上春月

住の江やはるえの波乃かすむ秋はみなのむきかな月そやとれる

浦春月

すくもたくまつもはてす霞むよの月やあまれとそつの浦人

旅の春月

あるさとの志のかたふきのあれなそへ月やむすしの春をしるらむ

幽栖春月

いつとせの春とふるやの梅ひさし霞むとすまさ月てもれくる

春月幽

さしわたる波にはしえてあとかすむ春の夜の月

月入花灘暗

よつ瀬をもわかれて入月の花より霞めるはるの川つら

暁更春月

明ゆく千鳥のしらむ山こえてほの〴〵みゆる春のよの月

春曙

しらみゆくをのへのさくら咲にけりかすみにくもる春のあけぼの

江辺春曙

春まくらの下のをかすむ六田川月まちかほにはるのあさけの

湖中春曙

波はるる比良や海とやしらむらん月はまだねる庵のまくらの曙

遠山春曙

をかの色は霞のうちにかはりえて松まつくるはるの山本

春秋のあはれをあらそふ人に

秋のよに月をまちとる枕にはあはれとみえし春の曙のそら

夕春雨

はる雨にさす傘あやなしといふよりてきりむすぶくれの山

菴春雨

春雨もきこしのふかき山の庵にかくれて世をすつる人しづまるよや

幽栖春雨

松としのふるみのあめふる夜なれ我と世すつるたくひとやとふへき

百首歌の中 閑中春夜

そこらくはかなれなれにふけるを春のよのまにまの春雨

春野

さくらのと枕の浦し春まてさすかにひくまの野への乃その草

そことなく野へすゝみしつるをとひるをあはれむかしに

帰雁

やすらはゝ雪ともみえよゆく雁のたのむを越路とさたむるへく

霞むよの月なきすゑそかへるなる花はうとしとおもひしとも

霧中帰雁

まれならねはつ羽を人にみえしとや霧かくれにし雁の行らむ

百首歌の中に　澤辺春雉

狩にきる野沢の草にかくれても雉のこゑのあはれまさらん

雉

明ぬとてかすみやおもふ雉のなくねもはるかにきこゆる春の山畑

雲雀

うらゝかにけふもゆくらん大空の野沢のもとにかすみの霞める

雲雀落

春の野のすみれの床におちて来つ羽もはたへる夕雲雀かな

なかなかにそらにはのほらてかく霞む野にも落つる夕ひはりかな

喚子鳥をきゝて

はるのある深山の松の峯のたえまにもなくよふこ鳥かな

百首歌の中に谷中喚子鳥

山ふかき谷のふるみちしれはみ谷のうちに鳴よふこ鳥かな

春虫

うらうらと霞むなるのいとふ虫の音ものこゑや風のこゑたえ

おほえんものともきこえすまつしろまし霞のこゑみせ

春獣

牧人のてにもはなれぬ駒の縄かきけるひかげくれて野へ出

春園獣

山彦のそのふのすみれの霞わけ入る人のおほみなる鹿の跡もみえけり

春日

わすれてはいそぎおとこそたどることそ日もながき春のかなしかれ

春日遅

霞立の外まかせしのびくらす春の日もながくかへる衣そはるけき

遅日

あくがれも花の木のまにかへりとやはるの日ながの暮そまたるる

西園の萩まで閑井日長といふこと哉

うくひすのなくよこゆふべもわく手に春にほふかな

人静而春酒

日もにほふをれもひなくさむまの時よりにほひのあれをうたてみし

みゝの日

よるへとは浦に海のせてちるなれの香くみそ後くるけふの盃

桃

かくしはくみなもとをたえぬ花のもとせるおはく何かへとや

浦のをの畑うつ袖もすけはくぬれもの心をのどけき

もろいね花もしをれと木のもとにそ人そとひくる

梨

なほをやめのすかたを今もよのへとや夜すがらへるふなきのなれ

花

咲きぬほどをまちしと思ふにはるもなくあるゝの日数に
ちるをしもむべぞをしみはまさりける老をやすむる花ぞといへる
あくまでもなれ見るべしひとゝせにいとなきのなきあそびなり
まことのちきりかなしまきくふたりあるかなる見をいひ立てむあれ
かへしても世の人のこと語りもあはれのこそむるや春のさかりなるらん
咲ちるをしらふさくらのゆかりに猿とすくさぬ春はなかりけり
まれぬものこくさぬ春はなきしかどもいつれの年にあくまでもみし
みよしのゝ花くもあさしとみえましにゆかりあるこゝろ合はせ
さくら花を雲とみしよりわかれぬ山もはるかなるかな
咲もやとねし山路やみちのほどの日数のかぎりある世に
来ぬ咲く日山にこ猿も花なかりしてふにやほかの袖ぞうつりしき
待つとのうきは日数をかぞへみずとさきはふちる花や何なるまし

待花

春の日もおそくしてふ見まで散ることふのは人やいひなしゝめん

遠山待花

いつのまに咲きかくれぬのかくしはぬれあひなくさむ峰の白雲

閑中待花

いつしかと待ふこゝろをなくさめて花まちぬるのまことのやどに花

閑居待花

まことのまにおの世の中にまほどもなきすみかゝな

花盛

桜もちるとわかれハちるらむ花も待しはしきも何かふきそ
人こそ見ねよおもひきや桜もちるはなのさかりハきえていゆらん

霞に花盛

さくら咲大井の里に一枝あすはさくらの花もちる世
よしの山乃花咲かゝりとみえてかへる来て人の知る
をまきて
花まちし雲とぞみる一えだしけれはけふみよしのゝ山
花のさかりに山里をとふ
かくしはつ花しちる月ハ家もなしやる里人とゝめ人きぬれ

見花

もれみるハあのさくれゆく春の日さへ折てしと誰のいひもしあ

静見花

霞たつ花ちるさぬもれの春雨ハ誰たた風にこそ誘ひぬ人さよ

見花延齢

ちとせのかるはるのんよひのれなは花咲見るとも年のへねへすかし

見花迎友

みせもやと人をそしの山桜あのぬこそ花の色さそ咲くれハ

小金井の桜見に伴ひて

春風にかをとめくれハあまのかはらにふるそ春なる
ゆきと見えて来たる
よしのなるやむしれぬ花のすはひるも波にませあるきの河なる
高きの河やあさ瀬まつ波白ゐるも花なき桜さそうて伸世

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

ほつえの若葉に花かゝる

若川みなぎく袖もかゝるとかすれたまのやどり桜さくころほ

舟中見花

こぎ行く浪のまに〳〵あくがれてたゞよひてぬるみの河舟

花下忘帰

ゆふぐれてやどりはさめつ山のはにかくあるおもの日さへ暮ぬる世

山ざくら花にあるしを誰と待ちめ旅とおもの暮てさへはしるし

花下暮日

くらしまでもれに見ぞはんと梢ひかへや花の下みのまさみゝを

花下送日

春つゝじはふもくしつあすの風さそはんましいかにやどらん

花下言志

日数なくまちもゝみしおもひまにあへる我らしかずして

心ふく花にこゝろをひとつやすらはんその春よ待もあらばあき

花如舊

あはれよの人もかはりて花まさふもかはらぬにほひのかはらさりける

風静花芳

をりしも霞にうもれてかをれ色は咲とはなしに花のにほふ風

花添山家色

紅になかすみもそらにまつ流山家もかはりなくもたれみなすらむ

毎年愛花

去年ころに咲ける木ともやさくらはかあるのぬる待の年に添ふらん

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223

ガラス使用

花下老
ちれはこそむかしもしのはかなしく旅を見し老をもおもほえにけり
花自多情
むさすかなきをみせしとられいかつおくれてすゑふかきものを
千種の花淡のやちよまてよみきる時花錦を
すゝきつゝしの花乃かゝりし花まさにしそめぬ人やなからん
花未飽
咲ちれと花にあかぬ心つきをかしの中ぬ里は花をたゝ
たよりもあかすはやまし山口の花に一枝乃道もなかくとも
折花
やま桜枝もたはゝにさかりぬる八重よりさきに誰のをおらし
ちれをちらて
折をかきし人なとよめる老をとなかく中のおもくゆえすきみは
馴花
日を経てもなれぬの花をするなと人のこゝろを深くそむく世
ちるものをとこゝはや咲花を別しやなくもの人なるを世
千種なるものよしの山乃桜のこ本をさうはしうゑ
ちるをそこて
よしの山花をよき花の梢なれはやすきとなるまておもひしを奉
惜花
あらはちるらんをいかにてしもなかりつとしもいとく花に別はま
依花詩友

たのめ来んとはまれなれはけふも待らちる花ならはいかにせし
にゆきふる人を待といふことを
柴の戸のまれなるまつれそ都人なつかしからで待らむ
しへてかの中もまてあへ
かはのくさの色香をわすれめや春のむすの花かたみ
花留客
桜まれあさよう待ふくる花ゆく人をおとやさしむる
ふのもとに帰ることをとゆる
なての人やはまらんふく待ち来は旅ねも訓しまなきは
古寺花
くちのこる閼伽井のさるをかくさまにいくよの新のうはせし

霧中花
たちかくす霧のうちにもさくらふもほのかに匂ひそめて花のいろ見せ
雨後花
春雨のなごりはしほれにもよしなるをおがさと誰かいひけん
嶺花
詠めやる春の峰をしらすなる花にまさきもるこそ見えつる
志賀花園
ことの葉乃名に香もそへて昔より今も匂へる志賀の花園
名所花
かをふやこゑのさくら咲ときは底さへにほふなるやすの池
咲ほのや霧かくれの岩門もあれなりひくくあまの坂乃せき

みよしのゝ瀧のみやこの花よりもむかしわすれぬ花咲にけり

名所桜

桜さくはるの河せをみわたせは雲の中ゆく舟のさゝ浪

関花

ふく風もあらきね木幡の山さくら花を関もる神やとむらん

恋情寄花

花のちることはいはれて恋そ身を花にまかする人ぬなりけり

寄花祝言

松も亦とちかくしも花をかさしはしらず年の春そはへゆかむる

寄花春

くれてゆく春をうらむも何かはの春半ある花のちるまゝに

露の花春さへまはれやわくかれつ花ぬに身なりかへし斗に

花衣はおつるそらことは

はくる桜にるる世おもちる花をはらもて春の山はそほせん

落花

ゆきとさけひはくる春の日に吹ときく花乃一さそふなる

おしめとも人まれ花の盛なくて風のこゝろにまかせすん

風さそふ流の花波寄りてたよのみやこに花さくら花ちる

かつらのみやこの雲ひますえて春満のちに桜も乱ちる

花のちるをそえて

雲とみる花もひもかきものをちらしとはふとなし

やま桜ちりゆくすゑしたひけむ我さへ風に涌のやはる

月前落花

月かけハいとゝあかきやこほれまし霞かくれなるちる桜かな

雨後落花

春雨のなこりにぬれてちる露まも猶さきぬるゝ山さくらかな

海邊落花

風にちるいそ山さくら花よせて雪をのせたる須磨の浦舟

名所落花

ひらの山花にあらしのふくからに波のしらゆふ志かの浦舟

古宮落花

花そちるふりにし宮の庭さくらいつの春のなこりとかせ

閑庭落花

うき世をはそむきし庭にちる花の誰かとひてしはしとかまし

後のあしたに花のちるを

やよひの海してうつろふ花にむれゐくはゝる春もかひなかりけり

八重さくら

一さかりあかてすきぬる花のあとに春をとゝめしや八重桜かな

なきこるもあかてちりにし花なかに心ふんてはなほそのかへ

ちるまて後にさきしなふ

すみれ

以さしは春の野もせにやとかりしかまのすみれの花になきさ

菫津に出ふるとて

むらさきの野中にゆるすみれまかせのゝハ摘すとも

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

閑居菫

あれはてゝすむ庵のまはゆひろくなりすみれつむともたれ人のみむ

古砌菫菜

朽のこるみきはの苔もいろそえてよそふるやすみれなるらむ

菜の花を

まれにても咲はほしなき初草の雲雀のことなかる花ひえ

園の菜の花を

此ころの春は旅にやあくかれん紀なかゆふなの花すゝほとに

かはつを

川よとのあともなかるとこゑはるいくろまへのうはるとも

も淵はひとくれは海つまれて糸なとこゆる野への春ろふ

堤

雨そゝくあらの口水ましてかへまさりかなつゝ

なかれもましむちをやをしむちつる山の流は堤なりけり

苗代

苗代のまつにはましみちへてあまのこのやまきて以めくれ

燕来

はるくれは門田に今そ鳥まさる程おとろへす時やしらぬらん

流くし

咲まほに波に木乃ほしはましまし流はほのあやめとい

躑躅

池まうつはるに時もは白さしさはまかまる波のとこそ見る

百首歌の中に巖上躑躅

あしひきのいはほはさかりと咲つゝし妹かあかものすそにしめらむ

所々山振

妹背山井手ゆく河にかけそへてにほひかはせる岸の山ふき

雨ふる日八重山吹を人のもとへ遣はすとて

春雨は七日ふれともやまふきの八重さくいろはあせしとそ見る

池杜若

花の影に水もにほひて池水をむらさきふかくなせるかきつはた

藤

松にかゝる松をたのみていつまてか千世のむらさきの藤浪の花

浦藤

そこの花の影とやいふらむむらさきの色こき浦ににほふ藤浪

藤懸松

咲そめて千とせをへける藤浪にまつはいたくかゝりぬるかな

暮春藤

日をかさね咲そふ藤のむらさきはくれゆく春も深き色かな

濱田男の庭に牡丹をおほくうゑたる家にまかりて

あるしに

大君の名にしも植へる花なれはいつも千世ぬる色香なるらむ

志賀山越

ふみそめし人のことはを春ことの花にわすれぬ志賀の山越

ゆくゝの春にちるさくらをもぬきとめつ志賀の山路の花にわすれて

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

霞とのみまかへてむかしこえゆる志のやま越

正臣の家の贈答会に志賀山越といふことを助丁が

ちきりし桜とこそ後あふこの志かの山ちるもわかれをさへとも

ありしこそこれとよめるなるへしと

あらそちる花のなからもへあらしの風乃まにさへ何おもふらん

春のそて

春もく暮さし浦しを大きさみちるとし花のいろそあやは

うくらひすも老せやなかきく世園よけみなくけをしからむ

浦暮春

もれいもやすあもあしも蘆の葉消つゆひして春やくれゆく

あくらむく春いくれゆく浦なみの何いつしよ立かへりせむ

湊暮春

淋しさる波まのもれいのほもなし比の湊乃春のくれゆく

山家暮春

日なからもしけきぬまに志くれ後のもみの山さくら

暮春雨

ちるにも桜の鳥ふ夜子くるしなかい春のまにまもあすやたえなん

暮春花

あさなあさ何の桜をもしくれなれはあるそまにもえきや

よそへていま春の日数をしむかし残るすなよ花をとるもの

暮春鶯

ちるも惜るもあれはや老とかまあらんなけ鶯いまの声もなかし

惜春

ゆく春は夏とのみこそたどらるれいつくしきをあくまでいはじ

惜春不語

山河やまるはよもせまなきかなるをとかひなくの春し　ものゝ名のみ

琴後集巻二

夏歌

首夏

みし春のなごりわすらるゝ夜こそ袖も花のかをりは名のこるなりけり

木のもとに茂れる花やかたはめん時なるものをすれがてにふ

首夏鶯

なつ山やおほのふるのきこえてわか葉にうつる鶯日に新なる

山家首夏

やま里は古巣にかへるやまのかねにあかれぬ花をさへて夜は木の葉かな

山ざとのはるまたぬ庭はかはれども若葉に海るる花もなくなし

更衣

くやしくも深くそめにしなれ衣そのわすれのあるよとこそれて
桜以後の袖ぬるゝの名ごりの花にかさねる夜も先涼しき哉
花なかりせし春のゝ後もきぬるゝへて又しも花に別をぬるかな

首夏更衣

ぬきかふる袖もやさしくあさ衣たゝかさね捨し人もあるよに

残鶯

ちりはつる花にすまくへなかしむ谷の紫のくれのうくひす哉

遅桜

さかりとはまたみぬをうつせ遅桜あれのかたへの袖うすくとも

山路花

手向山花のこえゆく路とへはいはまもさくらのぬさとこそちれ

谷残花

世をいとふ身のいほりの梢に桜かはかなきをぬんなやしる

卯月はつ山あをくして

かはらやかの紫つゝむゆきそをいはみの春その跡をあらし

残春の花をおしむ

あかぬるはわか行春のかくこそとらうをれさへもちしんとやする

林新樹

三輪山やふもとの杉のかげもなし恋ふるまの茂みをたつさへし

雨中新樹

雨そゝくかつ山かけのなか木立いましやしけるのみとりをそみる

新樹対月

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

なにはえやふなよそひし楫のをと海しく月の影さやかなり

よもの楓を

いはまゆるよそのもみちの楓しもまうてくる秋にあふけは
夏涼しくほふかへてのくれなゐは蕾のうちのなつかしさみる

夜山里に在りて

こつえさし清くなかるる山里をふみまとかとひなくしきん

野花

咲しくまつ清ける日数のかとえてうのはな垣く雲よなかりけり

野花遠方

うのはなの花も川てかすかなる雲のしらみかれし斗ふ

山家秋不

山路のかたはそまともかしこみてうへうのふくくまて雨ふるねまふ

野外松雪

うつまよ咲きてし山さとの明けの乃も雪ましらめるへちこそすれ

池かすみ月をとる

すのまれをとなかくかふ浦のきふみそ月のひかりもさやけき

神まつり

夜さそへいものゆきさき志賀を世ゆかとるそれもかなる斗は

大ともわりのまほろの使

神さふる杖のしさ花ゆくとものれかにをや人のわちあらしきん
こわの山すれのわたりまかてぬさとりゆくい使さるみうも
神まつるあまたうのいをみまの山えてくく使まつりそたつ

灌佛

法佛のあらはれましし法のみなかれて世の人もくみそめけむ
むかし人乃まゐのためしの舟はしはつきよや法のとなるらん

葵

小車にあふひのはしかざしてかもの神まつるけふそめくり来めでたい

毎年葵

かしこきやふかきはいく代すたのましして男女あれにはあふひてくる
卯月なかの酉の日めくるにはの宮の関して簾の
もとゆくを見て

きぬ萩原のよしこのわのしゆく簾のむかふ年いつるかなん

郭公

ほあのすこしくくに浦ふくかる声乃月になくはほととぎす
をやみもなのるの月のむすれかくる路の山たかいきれ
さのひ声は中々はし　郭公志てはなのこ路ゆかれは
おくたひに採ねすそおふき時をいま一声とまちかてひて
なれ聞きいあくちかきらひの人乃世に待ちはらしに郭公の鳴
郭公らひもしつとやす人のかへるさはけいや涙にれて
めはこしをおもへら路に時をも過ぎとかくはるかる
はさよ声なる一声まていまのそれ乃かきるもやすまれ
あきつのぬのふちるさとのほとときすなく声なれはこそすれ

待郭公

時鳥かくてや杉のむしとちや咲てたのみたかしるもへま

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223

ガラス使用

人傳にきゝてあけ来り郭公まちよわるとも猶やまちまん

初聞郭公

ほとゝきすけさつゆかゝる人もなし初音やきけは先まちし来ん

はしめてほとゝきすをきゝて

郭公さやかなる一聲は旅よりそめてこそ以下まされけれ

日をかけ雨まじりの夜の葉をへてもきこえけりまよほしきれぬ

郭公をきゝて

かくしほゝなきすゝみて我のあまむかしかたくともほとゝきす

郭公一聲

いくたびのかたらひくたくひも一聲のやまはほとゝきれ

郭公遥

きくほとも松もかはらぬほとゝきす今一聲をまちのまれもなし

山里にほとゝきす待て侘て

一こゑをきくもきくほとゝきす山路のまひにたちのこえもなき

海のほとりにて時鳥をきく

ほとゝきすなくしみ夜の一聲は波にうたはみちかくてすれ

松かえにとある朝郭公をまちて

郭公よふかくまかまくとやまの松をよ君をまちそまはるゝ

郭公遥

ほとゝきすうたかゝる雲はあるまでも木々のまちかたを君とまちゆよ

夜方時郭公

みよなかの中のやしほをきゝては、なくやいかなるの山時鳥

雲間郭公

村雨のなごりあしたゆく雲に誘はれぬ係となれるに

月かゝるゆふべの雲のたえまより先誘ひ出す郭公かな

閑中郭公

かくれなき宿のこゝやはふとさなる山住とも月にあくがれは

樵路子規

ほとゝぎすつま木の山路となりしかれてや帰りかへるらん

暁に時鳥をきく

訪ひまたも月に鳴かぬ夢の枕にやすの暁乃そら

曙郭公

むらしげる嶺の山乃端のに鳴て吹あける郭公かな

深林子規

ほとゝぎすよみのさ雲の絶るよりおちゆく月を志たひてぞ鳴

夏後郭公

杉むらにえず鳴くらし時すぎて咲あまれる花の緑さへに

郭公入夜聲

待わびし夜も深き杉の葉になるなきよしよし郭公

寝しのかたらひ人と思ふらし世の緑をそふ山ほとゝぎす

早苗

くれなゐ河のみなせに拂ふ藤田をも植る早苗とりけり

採早苗

早苗取ともに雨の杉ぬれし志ばしの田居の五月雨の比

はるの歌乃子苗城

さなへとるはるの歌乃さと人そ子苗のそは種の秋や待らん
なき

堀つ田のさなへともおもふ気てなほなほ咲なて又もとひ来ん

刈菖蒲

あやめつくまふのゆあしもと思ひしと袖ハよとのよおりたちまか

君か代のなかしの濱乃あやめ草今はたくまあしまそり

雨中菖蒲

五月雨よぬるともひまんあやめ草あやかしくまゐとさをまかやハ

節後菖蒲

さめうのはおりるあやめの根をみすくる子苗のゆあとやりおしきん

夏夜

なつの夜そむすふあやめの枕もとに短夜なきとハかるゝひ通

ほとゝきす

そこともなくかなたもうらし橘のかをりちるさとの鳴くれの声

橘乃かをれる法そ木の本乃草の露を香す匂ひ来り

夏橘薫風

かもほえすられそかす夕の香子袖のかたをのよ乃かもちに

風静夏橘芳

ほともそれのえ月よ新むハ吹しゆむ風のひまさへ匂ひなくぬに

橘薫袖

むしかやなきもちもれのおひ風に右乃はなさの袖のかをるを

枝橘

橘乃かれちるやとふ一枝折ん志のむかしの香やむすふと

暁更嗅橘

たちはなにかをりし袖そうつゝなる以つも採さめのかくし侍りに

盧橘子低

橘のたれの露そふ袂しれに霽まとのをれる雨のをこれ

夏祝

よろつ家乃小島の磯のおひ風に梓さへ袖も香まてにほふ家
あるし

村雨乃なこりの露もにほひつゝちるやあふちの花乃下蔭

薬猟

以めしはる夜野の草葉かゝりし花きそひのかする滝をゝちおとも

霖

さみたれにはる花の名も絶まなう田の岩ましくこえしまつ

閑中五月雨

やまれぬにおとつれし君は五月雨のあさまあつとも誰とかはへよ

旅泊五月雨

五月雨に日数ふるえのむやひ舟梓さへなみのしとに朽はて

さみたれの雨にはおても朽もてゝみなれる夜の川なみ

五月雨まされる昔はの友とふ方まてぬれそしるへき

はまくるを何ふすさめん五月雨のまをとへてとふ人しなけれは

五月雨晴

さみたれに板井の水はまさりけむしらしや月のかけをやとさん
五月まつ梅のやとにゝほひて
ふさのみきえてなきる五月雨のあやめの名におふらむの下草
水鶏
あやめ草おふる野澤のみこもりにあやまれてなくくひなかな
水鶏何方
柴の戸は明なからねしなかはのよふかく水鶏やいつこなるらん
暁水鶏
浦よの戸はたゝきゝやみて明る枕の水鶏は人をはかりさらまし
夏月
あはさきもやすらふほとにまきちかる夜の枕の月

山のはの霧もきりも匂ひてねとなひふかくあるかすゝのよの月
短夜月
さしぬるに明やすき夜を月影のまたれて出るこゝろなくもかな
水上夏月
ゆく水はむすひもあへすなかはの夜の月は水とのみてこそゆかし
山家夏月
涼しさの以上はこれと山さとは足つき月のかけやとる比
竹裏夏月
くれゆきは月と風とのやとしはてゝ夜をわするゝ窓のむら竹
夏月涼
棹させはなみをわすれて大河よこほりなくゝ浪の月かけ

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

夜の桜月あかし

くさへまれゆくそのすゝしき風に月乃ひかりちらされ
なかりしに

桜のかけ草子やはるゝ夜のさくもあはれにそへつかてしこのに
かてしこの花咲てあかねか

かつらも咲てめしよりも花夜のはるはなかにもゆかしく
なそしらの花さかりもちるとこそ

花夜のおもし一時にしも秋乃もみちのはなやかにおほめてこそ咲

愛瞿麦

霄の雨乃かかる以のかや露ふきへこす瀬のかすて花夜乃あれ
かてしこのさかるさ人のもとへやらんとて

ちらぬまをとてはこまちよ花夜のやとにめはらしきのなをしもを

夜草

なは草よ野中のかららつゆれぬものあはれをたとふ斗ふ
秋ちかき頃との草むら露さへももすふ斗またやさしき利

草花先秋

いはしるも秋のちくさの花のすもなすみえけるゆゑの一つの形
子古のもとより未利ふ一もとおこせけるをよろこひて
めつらしかのもとのすゝきのあれあかまるすく香こそよはへ

葵

かゝきまもなみれはなきて色すせよみたてさむ虫を何のとのめせ

百合

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

なにはの野に誰とやさしと思ふらん葉かくれにさく姫ゆりの花

鵜河

かはし人う河こつとや波のうへにみなれてこゆる瀬々の篝火

折こそあれ月のかつらの里人もやすらへてこのむう河をつとて

螢照樹

かくれにて康のうちとや尋ぬらんみなほしの影をもるかり

所々照樹

峰やまさ松もやあるゝ夕月山ほしのひかり吹まさしと

夏虫

秋ちかき夜すそたて夜むしのむすふおもふぬなくらんい

螢

風さえふ峯のおとさくる霧のなかにおほえて吹ふ笛の音

浜笛

松原や乃岸いあまふかりゆくや浜海のそとみゆるかな

瀧邊笛

落瀧つなかのそこのしらむまにひかりを立て飛ぼるるかな

くれむそのほてる

風さえふ夜野乃草の露をとよはみもむすやふ笛の音

螢似露

かゝみ行るともかき露とみえなから何ゆえ消ぬ思ひなるらん

深秋笛

うちとけて夜なよなの池よそふ笛よしておもひはこのれをてする

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223

ガラス使用

晩夏蛍

みそぎ河なかるゝもへほす袖の露とみだれてかよふ蛍のかげ

ある曹司のまへをとほりけるかよるは蛍のなどいひ
おしまれいとはるゝをと

むすれの光庭にはふる夜むしろ誰ゆゑ身にあまる思ひそ

大井河の夏

ほとほる瀧つ岩ねとなかれ来てとかせの波に氣をそゝくる

焚き火

いふせさ哉よそのこゝろもくるしとや絶しは浦に焚き火

唯ゆきとまるもかゝるかやり火に我秋かぜの手にふき
かやり火をとえて

ならくに焚きの夕こゝろもつゝ我もこゝ滝を月にまよはしぬ
焚き火に我もよせ人のいふせさ哉秋もひくくて秋やあの手にぬ

蓮

はちす葉のよどのこやそおこしぬ露かと人の世にさらはなれ

池上蓮

池水の涼きは底もあらはれつふこそすまぬ葉のさかりに

池の蓮をよめる

新らつすいきの鏡にきよみれは契りのくれはさくはなもみえそか

氷室

大君乃諸代かの坂の氷室ありいつとも夏をしらぬ代に
千世の冬て消ぬこめしと氷室守杉の清き仕なきらしきぬ

夕立

すゞしさに山ふかみより雲こえてゆふたちすぎしあとの滝つせ

夕立晴

かくなから日やゝさし夕立のなこりをとむる玉さゝの露

蝶

咲のこす花のあたりにまよひ来て秋にかはらぬ蝶のもろ羽

游絲蝶

夏よりかつむ絲のうちにこそはへ楫にむすへる蝶のもろ羽

まきかはの岸こす波にさそはれて峰より花る蝶のもろ羽

あふき

うちもたる手にとるや夏のてすさひを誰ゆかりとて袖にかくさせる

秋ぞとくあふぎの風にかよひきて袂の月のかけをやとして

閨扇風

かたはらにおきても風はまたまかれ誰にかこたむ閨の扇そ

泉

袖ひちてむすふいさゝ水こゝろはえぬ心をもかゝれ

泉のまへのすゞみ

すゞみとて山井のもとにむすひ結へともかたはあかぬ音に

但有泉聲洗我心

おく山の岩根しみつおつるにてわか心をもかくすゝしく流し

水風吹涼

夕風のさそはさらなは池水のさゝ波に夜をとするへしやい

近瀧涼生

葉繁乃露をかたく夕風もなき軒の岩ハ先そすゝしき

納涼

風さやく繁茂のしけみの下すゝみ寄ちる浪ハぬれぬともよし

樹陰納涼

すゝしさは諸やる袖に露ちりて苔のむしろを拂ふ松風

百首歌中におなし題を

涼しさのいはにこそあれと夜ハいてゝ夕風そよくむらの下草

松下追涼

山松のひゝきそ浦に浪よなるあつさなあふくちめくして

すゝし河に舟をとゝめて

夕川のすゝしさとめて出く舟いはのこ浪のゆくに浦やせん

桃余の君乃涼川のみちもそて

風すゝる槐のしまの下露にぬれてたもとは夜なかりけり

樹陰夜風

夜ふかくぬるてはやよ枕ゆるやとつえおろす木かけの下風

夏神楽

なかはのくもあかるわらし椎柴の下ゆく影に月もやとれて

荒和祓

淺茅河瀬ゝになかるゝすけの葉乃あたなるくしの白波

祓麻

波のさへにまて祀かおきふかぬきとるやしそいつかの言うかへ

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223
ガラス使用

特1
2223

はしゐまと古袖に波とのきをる瀬しまみとし

ぬさの追風

国立国会図書館　タイトル『琴後集 15巻』　請求記号 特1-2223
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『琴後集 15巻』 請求記号 特1-2223

ガラス使用